

を認めない例が多かった。

【結語】 IMA の術後血流運搬能は SVG に劣らず、運動負荷時にも有効な効果を期待できる。

19. Buerger 病に対する PGE₁ 治療効果判定法としての ²⁰¹Tl シンチグラフィの応用と評価

河中 正裕 石村 順治 末廣美津子
立花 敬三 福地 稔 (兵庫医大・核)

Buerger 病患者 2 例に対し計 3 回 PGE₁ 治療を行い、その治療効果判定法として ²⁰¹Tl シンチグラフィとサーモグラフィを比較検討した。

症例 1: 38 歳男性。20 年前から喫煙 1 日 60 本。間歇性跛行で来院。左総腸骨動脈起始部の閉塞を認めた。PGE₁ 1 日 120 μg を経静脈的に 1 か月間投与することにより症状改善しチアノーゼも消失した。いったん退院したが再び症状悪化のため再入院。再度 PGE₁ 治療により改善した。症例 2: 61 歳男性。15 年前から糖尿病治療を受けてきたがコントロール不良であった。喫煙 1 日 40 本。足趾チアノーゼのため来院。空腹時血糖 201 mg/dl。両側脛骨動脈の狭細化を認めた。PGE₁ 1 日 80 μg 点滴静注により症状は改善した。

各治療前後の血流状態の改善につき比較した。サーモグラフィでは治療後血流の改善を認めたが、足趾の血流改善は明らかではなかった。²⁰¹Tl シンチグラフィは、仰臥位の患者に ²⁰¹Tl 111 MBq (3 mCi) を静注し、5 分後と 3 時間後の血流状態を、²⁰¹Tl の足底部への分布を指標に観察判定した。治療前 ²⁰¹Tl の分布は不良であったが PGE₁ 治療により 5 分後から足趾への ²⁰¹Tl 分布の明らかな改善を認めた。PGE₁ 治療前後の足底部 6 mm×6 mm あたりの ²⁰¹Tl 集積を、胸部への集積に対する比率で検討したところ、いずれも改善していることが確認できた。

足趾の血流の評価には、²⁰¹Tl シンチグラフィはサーモグラフィよりも有用と考えられた。

20. 一過性全健忘症の IMP-SPECT 所見

三重野正之 橋川 一雄 上原 章
柏木 徹 小塚 隆弘 (大阪大・中放)
木村 和文 (同・バイオ研核)
松本 昌泰 鎌田 武信 (同・一内)
田辺 敬貴 西村 健 (同・精神)

一過性全健忘症 (TGA) は、Fisher らにより命名された一過性の記憶障害を中心とする症候群である。しかし TGA 発症の病因は依然不明であり、発症中に脳血流の変化をとらえた報告は 1 例のみである。今回われわれは、IMP-SPECT 所見により TGA 発症中の脳血流変化をとらえたので報告する。

患者は既往歴に高血圧と高脂血症のある 63 歳の女性で、朝突然に同じ質問を何度も繰り返すという状態で発症し、神経学的所見としては、6 桁の数字の復唱が可能であり、3 物品の呼称は正常に行えるが、数分後には呼称を行った 3 物品の記憶が全く不能であるという recent memory の障害が認められた。このような記憶障害が 8 時間持続し、消失した。われわれは、この患者を Caplan の診断基準に従い TGA と診断した。TGA 発症前後の検査として、IMP-SPECT, CT, MRI, 脳波検査を施行した。TGA 発症中に撮影した CT には異常を認めなかった。TGA 発症後 1 週間経過した脳波においても異常を認めなかった。TGA 発症後 1 か月経過した MRI では左海馬にのみ小梗塞を認めた。しかし MRI で認められた左海馬の小梗塞と TGA の関係は、TGA 発症中あるいは発症直後に MRI が撮影されていないために不明確である。IMP-SPECT では、TGA 発症中に両側側頭葉内側部と両側後頭葉の血流の低下が認められたが、TGA 発症 1 週間後には発症中に血流低下のみられた両側側頭葉内側部と両側後頭葉部の血流が改善していた。この IMP-SPECT 所見より TGA 発症の原因には、後大脳動脈により灌流されている両側側頭葉内側部と両側後頭葉部の一過性虚血が関与していることが示唆された。